明治大学博物館広報誌

MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. 76

開館しています。

特集

再始動する、博物館

NEWS／展示 Zoom in!／博物館研究最前線／
収蔵室から／M2カタログ

特集

再始動する、博物館

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年度の明治大学博物館の活動は大きな制約と変更を余儀なくされました。年度上半期の状況については前号のミュージアムアイズ第75号でも紹介したところです。その後、夏の第2波、秋から冬にかけての第3波の感染拡大に見舞われる中で、感染防止対策を講じて活動再開を模索してきました。今回は、コロナ禍における当館の取り組みを紹介します。

1 展示室一般公開の再開

2020年3月から長期にわたって休館していましたが、10月12日より常設展示室・特別展示室の学内関係者への公開を始め、さらに11月11日からは一般公開を再開しました。休館から約8か月、実に254日ぶりのことでした。他館の体制を参考に、開館時間・曜日を短縮し、来館予約は不要、一時的な入館者が20名を超えた場合には入場制限を行うこととしています。また、団体見学の受け入れ、来館者への展示解説（友の会ボランティア・学芸員いずれも）は休止しています。

アカデミーコモン入口から博物館利用者専用の仮設動線を設定することで、他施設利用者との接触機会を減らすよう工夫しています。また、来館者には連絡先等のカードへの記入をお願いしており、万が一感染者の利用が明らかになった場合でも対応できるようにしています。加えて、各所に手指消毒用アルコールを設置しているほか、手すりなど接触が予想される個所の消毒を適宜実施しています。こうした対策をとることで、2021年1月から発出された緊急事態宣言期間中でも開館を継続することが可能となりました。10月から開催した特別展を皮切りに、企画展、常設展示室のコレクション展も順次再開しています。

2 図書室の再開

前号でも紹介しましたが当館の図書室は、貴重な蔵書を有し、学生ならびに教職員の教育研究活動に不可欠な施設であることから、展示室に先駆けて6月に学生・教職員の利用を再開しました。9月からはオンライン予約制を導入して午前・午後の2部入替制で各回最大9名とし、祝日を除く月～土の授業日に公開しています。広い展示室とは異なり、限られた空間での閲覧利用となるため一般への公開再開には、まだ時間を要する見込みです。

3 オンラインコンテンツの公開と拡充

こちらも前号で紹介していますが、休館が始まった3月からSNSによる情報発信を強化しています。また、常設展示室内を見て歩くような感覚が体験できる「展示室をあるく」を含む「明治大学博物館ONLINEミュージアム」のほか、常設展示室や収蔵資料の紹介動画、北海道博物館主催の「おうちミュージアム」に連動した塗り絵やパズルなど、オンラインで楽しめるコンテンツをホームページ上で大幅に拡充・公開しました。次項で紹介するような講義・講座での活用のほか、新聞やテレビ番組でもコンテンツが取り上げられるなど、注目が集まっています。さらに、新たに常設展示室で来館者が視聴できる動画ガイドの試験運用を開始するなど、インターネットを活用した様々な取り組みを行っています。

4 学生教育・生涯学習講座の実施

明治大学の全学部生が受講可能な「全学部共通総合講座大学博物館の現場を実見する」は、オンラインでの開講となりました。また、学芸員が出講している一般社会人向けの生涯学習拠点・明治大学リバティ・アカデミーは対面講座がすべて中止となりましたが、12月にオープン講座として学芸員による明治大学博物館の常設展示と特別展のオンラインギャラリートークが開講されました。どちらの講座でも、前項で紹介した明治大学博物館ONLINEミュージアムの「展示室をあるく」が活用されました。臨場感のある解説が好評で、全国から100名を超える参加者がありました。そうした中で、博物館実習は感染拡大の波の合間を縫って対面で実施することができました。やはり対面によって得られる学びは大きいものがあり、今後も時期や方法を勘案しつつ対面での実施に努めていく予定です。

5 南山大学人類学博物館との協定事業の実施

前号でお知らせしたとおり、交換展示は秋にオンラインでの資料紹介という形で実施しました。また、シンポジウムについても、初のオンライン開催となりました。今号（8・9ページ）に詳しい内容が掲載されていますが、北は青森県から南は鹿児島県まで66名にのぼる全国の博物館関係者、研究者、学生の参加があり、協定事業のシンポジウムでは過去最多となりました。こうした専門性の高いテーマでは、参加の地理的ハードルがないオンライン開催が適していることを示しており、今後の参考になりました。

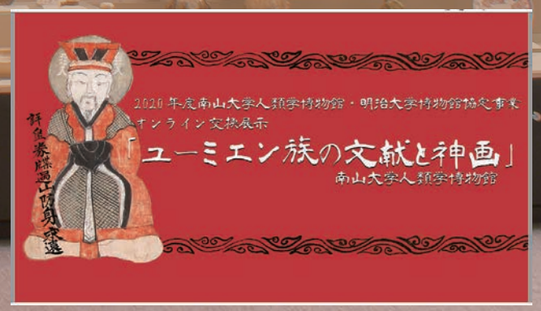
6 オンラインを活用した友の会活動の支援

昨年2月以降、大学の入構制限が始まってから友の会の方々も館内に立ち入ることができなくなり、活動の柱である講演会、見学会、分科会、ボランティア活動がすべて停止状態となってしまいました。この状況を動かしたのは、やはりオンラインの活用でした。Zoomの利用方法を博物館がレクチャーし、まず友の会理事会の会合が始まりました。一部の分科会では既にZoomやLINEを用いたオンライン会合が行われていましたが、秋には博物館から各分科会へZoomの利用を提案し、希望する分科会には支援を行いました。また、展示解説ボランティア研修の一環として学芸員のオンライン講座を実施したり、分科会と共同で他館の企画展のオンラインギャラリートークを実施するなど、対面での活動がかなわないなかで、オンラインの積極的な活用を支援しています。インターネットを利用できる会員に参加が限られてしまうという面はあるものの、こうした支援の結果、オンライン講座等では60名ほどの参加が得られるなど、新しい方法が会員間でも浸透しつつあります。

長い休館を経て、明治大学博物館はこのような形で再始動しています。今後も、しばらくは新型コロナの影響が続くと思われますが、大学博物館の使命のもと、積極的な活動に努めてまいります。これからも、明治大学博物館にぜひご注目下さい。

（忽那敬三）

2021年1月まで延長開催された特別展「氷期の狩人は黒曜石の山をめざす」。バーチャル展示室「展示室をあるく」も12月から公開されました。オンライン上で展示の様子を見て回ることができます。



南山大学人類学博物館とのオンライン交換展示。相互の博物館ホームページで収蔵資料解説動画を公開しました。

NEWS

NEWS 01 館長・副館長紹介

博物館 副館長　**長尾 進**
（明治大学国際日本学部 専任教授）

2020 年 4 月より、副館長を仰せつかっております。専門は、剣道史を中心とした武道史です。武道史の研究においては、考古部門や刑事部門のこれまでの研究成果が少なからず参考になることがあります。私自身が新たに学ばせていただいております。コロナ禍における博物館の開館・運営は難しい部分もありますが、当博物館のミッションの一つである「社会貢献・社会連携の拡充」を常に念頭に置き、千葉館長の卓越したリーダーシップのもと、当方も微力ながら運営に尽力して参ります。

博物館 館長　**千葉 修身**
（明治大学商学部 専任教授）

2020 年 4 月 1 日に館長職を拝命し、日々、当館のスタッフに支えられながら、その学術的・社会的使命を遂行する道を模索しております。専門は会計学，主にドイツを中心に、その制度的な役割と機能を記号機能論的に探求しております。一見、博物館学とは無関係な領域にみえますが、当館も人々の生活には不可欠の社会的・制度的施設であるとの認識から、その着実な運営を心掛けてまいる所存です。収束する兆しのない COVID-19 の中にあるからこそ、当館にて、幾多の禍を克服してきた人類の営みや知恵に触れていただきたく存じます。

NEWS 02 明治大学付属 明治高等学校・明治中学校で校地内遺跡出土品のアウトリーチ展示

下原・富士見町遺跡は、調布キャンパスの明治高等学校・中学校校舎建設にともなう2004～2007年度の明治大学校地内遺跡調査団による埋蔵文化財発掘調査で発見されました。遺跡からは、後期旧石器時代の多数の石器製作跡を中心に、縄文時代、近世～近・現代の遺構と遺物が出土しました。明高中と出土品を保管する博物館は、在校生の歴史・地理への興味を喚起し理解を深める目的で、校舎1階のホワイエに設置した展示ケースに下原・富士見町遺跡出土遺物の展示を制作し、昨年11月26日から校内で公開を開始しました。解説のパネルとともに、遺跡から出土した約3万～2万年前の後期旧石器時代の石器や復元された縄文土器、打製石斧が展示されており、生徒たちはいつでも見学できます。展示は今後、社会科授業などを通して教材として活用が見込まれます。また、12月14日に当館島田学芸員が、社会科の教員を対象としてオンラインの旧石器・縄文時代の基礎的なレクチャーを実施しました。

明治大学
調布キャンパス
校地内で
遺跡発見

NEWS 03 学芸スタッフ紹介

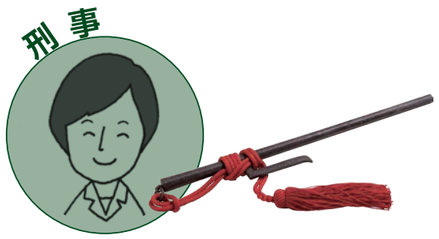
明治大学博物館の学芸スタッフを紹介します。4 名の専任学芸員が、それぞれの専門分野に基づいて、展示公開・研究・資料整理・学生教育・生涯学習講座を展開しています。

忽那 敬三（くつな けいぞう）
考古部門（弥生・古墳時代）・図書室担当

埋葬に関わる遺物や遺跡から、弥生・古墳時代の家族や祭祀のありかたを復元する研究に取り組んでいます。博物館は学びと交流の拠点です。学生さんも、一般のみなさんも集える「場」を作り出していきたいと思います。

島田 和高（しまだ かずたか）
考古部門（旧石器・縄文時代）担当

石器時代の黒曜石資源開発史や日本列島における現代人の定着に関する考古学的研究を推進しています。昨年公開しました明治大学博物館 Online ミュージアム（http://ict-museum-meiji.tokyo）へのご来館をお待ちしております。



日比 佳代子（ひび かよこ）
刑事部門担当

専門は日本近世史です。古文書が好きでこの職に就きました。地域社会と行政、転封、藩政史料論などについて、当館が所蔵する内藤家文書を素材に研究をしています。

外山 徹（とやま とおる）
商品部門・博物館情報発信担当

伝統的工芸品の製造技法、商品開発、流通・販売の現状や産地自治体の行政施策などの調査・研究に携わっています。今年は大学創立者出身地自治体の工芸品を用いた常設展示の一部展示替を予定しています。

展示 Zoom in!

企画展

因・伯・雲のやきもの

～山陰の手仕事から～

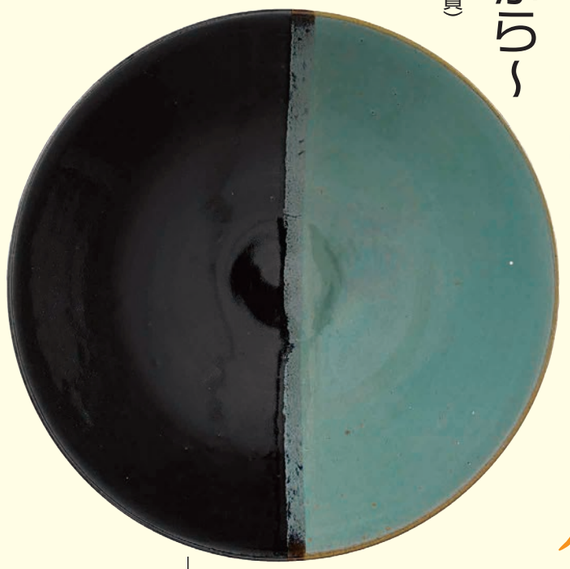
外山　徹（商品部門学芸員）

山陰地方は石見焼（島根県）を除くとまとまった規模の産地こそ未形成ながら、鳥取・島根両県合わせて70社以上と、実にバラエティに富んだ窯が操業している。全国陶器市などのイベントで目にすることはないが、れっきとしたやきもの産地として存在している。

明治大学博物館の前身の一つ旧商品陳列館は、1950年代後半から地方物産品の収集をはじめた。1959年に日本橋白木屋で開催された中国五県物産展でまとまった数の鳥取・島根両県の施釉陶器を購入している。ちょうど民芸品がブームとなって山陰の諸窯が注目された頃で、1965年には現地に出向いて資料収集をおこなった。2016～2018年度に実施した産地調査は、かつての収集品に対する再評価を目的とし、今また人気の出てきた民藝のテーブルウェアにも注目した。

伝統の形成

歴史という面では江戸時代以来の窯に、鳥取藩池田家御用の因久山焼や松江藩主大名茶人松平不昧ゆかりの楽山窯と布志名焼雲善窯が、民窯としては鳥取の牛ノ戸焼や島根の布志名焼、石見焼がある。また、近代に入って後、さらには高度経済成長期以降の開窯も相当数に上る。昭和の戦前期、やきもの需要の変化や他所からの廉価品の流入により山陰の窯場は苦境に瀕していた。そうした中、古くからの手仕事の美を称揚する民藝運動の指導者（吉田璋也、河井寛次郎、バーナード・リーチら）はその持ち味を生かしつつ、新たに都市住民のニーズに応え得るような商品の開発を指導した（新作民藝運動）。



牛ノ戸焼染分皿
鳥取市　1965 年収集

布志名焼エッグベーカー（湯町窯）
島根県松江市　2018 年受贈

伝統の継承

前近代的な製法に依りながら、主に近代化の過程において拡大を見てきた山陰地方の陶業は、「伝統」というものを再考する上での問題提起をする格好の事例である。山陰の窯はほどよい相互の距離感の中で地域のニーズに応えてきた感があり、「拡大→競合→衰退」というサイクルにもまれにくく、生活スタイルへの適応で経営を継承し得たという側面がある。つまり、増産の設備投資をして急激な生産力の拡張を図るという過程を経ていない。地元で産出する胎土や釉薬原料の使用、数ある連房式の薪窯の残存は、生産量に見合うだけの新方式導入のメリットが無かったからとも言える。

現状と課題

当地における古式製法の継承は、「伝統」に価値を置き意図してそれを残したというより、当地なりの合理性による印象が強い。山陰地方の陶業には近代工業化による商品の量産・規格化の過程で成立した安定的な流通経路も存在しなかった。したがって、販路は個々の窯が各々の流儀で開拓せざるを得ない。しかし、近隣のニーズや土産物ばかりではなく、近年では高級で趣味性の高い雑貨を扱う大都市圏のセレクトショップというチャネルを持つ窯もある。旧来の流通システムの機能不全が指摘される現状において、むしろ山陰における状況こそが、今日的な手作りのやきもの流通のトレンドを端的に表していると言える。

縁鉄砂呉須釉ボウル７寸（出西窯）
島根県出雲市　2018 年収集

掛分青白釉徳利（因州中井窯）
鳥取市　2017 年収集

出雲焼秋草の絵茶埦（楽山窯）
島根県松江市　2018 年収集

伝統の再構成

現在、産地のステレオタイプな印象から離れ、個々の窯ないしグループが独自性を追求する傾向がどこの産地にも見られる。暮らしの器を製作しつつも、山陰の窯は製陶業というより陶芸家という性格付けが似つかわしい。近隣で採取される素材料を用いつつ、組み合わせの妙からオリジナリティを生み出している点では、伝統から外れているとは言いがたい。元来、他との比較において際立った独自性があったとは言いがたく、古陶磁的な産地カラーに創造性を遮られることがないが故ではないだろうか。山陰の器は「やきものブーム」世代よりもずっと下の若い世代に、感性で受け容れられているのだ。

袖師焼ピッチャー
島根県松江市
1959 年収集

上神焼飾皿（中森窯）
鳥取県倉吉市　1965 年収集

法勝寺焼菓子鉢（松花窯）
鳥取県南部町 1959 年収集

※会期は４月30日～５月31日まで

シンポジウム「今、博物館は何をするべきか ―コロナ以降の持続可能性を考える―」

黒澤　浩（南山大学人文学部教授）

コロナ禍と博物館

明治大学博物館と南山大学人類学博物館の連携事業は、今年で10年目を迎えた。毎年、博物館研究をテーマとしたシンポジウムを開催していたが、今年は新型コロナウィルス感染症の拡大を受けて、この状況の中で博物館はどうしたらよいのかを考える機会とすべく、12月7日にオンラインでのシンポジウム開催となった。

シンポジウムのテーマは、「今、博物館は何をするべきか―コロナ以降の持続可能性を考える―」とした。これは、現在の状況の中で、博物館自体が持続可能なのかどうか、あるいは持続可能なものにしていくためにはどういうことが必要なのか、について考えてみることを意図したのである。

実は、このシンポジウムの企画段階では、SDGsのような持続可能な世界の構築にいかにかかわるか、ということで考えていた。同じテーマはすでにICOM日本委員会によるシンポジウム（2020年9月）で取り上げられていたが、このテーマを考えた理由は、地球や人類が持続しなければ、その産物である博物館が持続可能になるはずがない、ということであった。コロナウィルスをはじめとしたさまざまな感染症も、実は自然破壊によって野生動物と人間との距離が近くなったことが原因の一つとされている。そういう意味で、博物館が地球の持続可能性にどのようにコミットできるか、これが当初の企画だった。

博物館の危機と存在意義

しかし、今回のパネリストと打ち合わせを進める中で、その方向は次第に修正されていった。パネリストの一人である九州産業大学の緒方泉先生によれば、このコロナ禍によって、世界の博物館の13％が閉館する見通しであるという。そうなると、話は地球や人類の持続可能性を語る以前に、博物館自体の持続可能性を考えなければならない、ということになる。日本でも多くの博物館が経営的に危機的状況にあるといわれており、世界といってもけっして他人事ではない。

こうした問題を論じるにあたり、一つの軸を設けることにした。それは、博物館という存在がわれわれ（日本ということではなく、人類のという意味でのわれわれ）の社会にとって「必要な存在である」という認識をどうしたら高めていくことができるのか、ということである。これまで日本の博物館・博物館学では、博物館と社会とのかかわりというテーマについて、そう活発に議論されてきたわけではない。特に日本の場合、近代博物館の成立事情からみて、欧米に比べて社会が博物館をあるべきものとしてとらえることが少ないように思う。このことは、自治体の苦しい財政事情の中で、しわ寄せが必ず文化政策に来ることを見てもわかる。

このように言うと、博物館は社会という「実体」とは別に存在し、あたかも社会の外にあるかのようにイメージしているととらえられるかもしれないが、そうではなく、様々な人やモノが絡み合い、関連付けられる網の目として社会をとらえようということであり、その中に博物館を位置づけよう、ということである。言い換えるならば、そうしたネットワークの中で、「われわれはここにいるよ！」という声を上げ、適切な場所に位置取りをしていく、そんなイメージだ。

報告と討議

今回のシンポジウムでは3名のパネリストに、博物館が社会とかかわりあうための手立てについてお話いただいた。

明治大学の井上田佳先生からは、英国でのコロナ禍の中での博物館の対応と学芸員教育での人材育成について紹介してもらった。最近のはやりの言葉で言えば、目指すのは、危機的状況に対応できるレジリエンスをもった人ということになろうか。

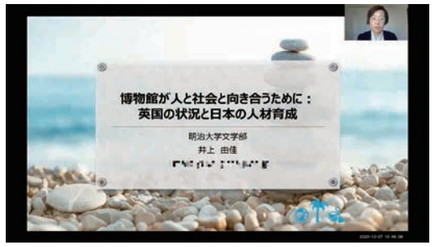
続いて、九産大の緒方先生には、医療と博物館についての先進的な事例と、それを実現していくための科学的な裏付け（エビデンス）の必要性について報告してもらった。日本でも回想法などの取り組みはあるが、ここではより幅広い医療との連携が展望されている。

3人目は国立民族学博物館の広瀬浩二郎先生で、周知のとおりユニバーサル・ミュージアム運動の中心人物である。コロナ禍で何かにさわること自体が忌避される風潮があるが、博物館で資料にさわるというのは、ある意味で「濃厚接触」という言える。しかし、広瀬先生はコロナの拡大こそ濃厚接触のマナーを取り戻す好機だと言う。

3人のパネリストの報告は、いずれも博物館が社会と取り結ぶ方法について、思いもよらない実践を示してくれた。ただ、実践例だけでは、それぞれの館の活動には適合しない場合もあることも確かなので、今回は、個々の実践とともに、どのような方向性があるのかを視聴者がそれぞれで見定めていくヒントになることシンポジウムの目標に据えた。

3名のパネリストの報告後、討議に入ったが、そこでは一応のシナリオは用意したものの、それに拘泥することなく、視聴者からの意見を中心に据えることにした。これは緒方先生の提案によるもので、コロナ禍の閉塞感の中でできるだけ多くの意見交換をすることにしたのである。時には厳しい質問やコメントもいただいたが、全体としては非常に有益な場になったものと思う。

コロナ禍は危機的な状況をもたらしているが、このシンポジウムが災い転じて福となすささやかなきっかけになることを願っている。



報告1　井上由佳氏
博物館が人と社会と向き合うために：
英国の状況と日本の人材育成

報告2　緒方泉氏
「博物館」でリラックス効果がある？
―心理・生理測定法の開発―

報告3　広瀬浩二郎氏
「非接触」社会から「接触」は生まれない
―2025大阪万博をユニバーサル化するための提言―

「年木庵喜三製」の染付蓋付碗

林田　真由子

商品部門の収蔵品は経済産業省指定の「伝統的工芸品」またはそれに類するものが大半である。中には70年近い歳月の経過で美術史関係資料としての性格の芽生えた資料も存在し、近年、同様の資料をかつて銀座で陶器商を営んだ関係者から受贈したことで、より充実することになった。内容はおおよそ1930年から50年代の陶磁器で、旧佐賀藩御用窯の系譜を継ぐ鍋島焼、12代酒井田柿右衛門作品を中心に多岐にわたっている。

その中から興味深い資料として、「年木庵喜三製」と銘の入った染付蓋付碗を取り上げよう。「年木庵喜三」は江戸時代末から明治初期に、有田の名陶工、深海平左衛門とその息子である墨之介と竹治が用いた。息子二人は有田の香蘭社の前身である、合本組織香蘭社の設立に携わった。合本組織香蘭社では共通の「蘭マーク」に工人の苗字や号を添えたようで、香蘭社ホームページ内の「香蘭社 銘について」の記事中に蘭マークに「年木庵喜三製」もしくは「喜三製」が添えられたものが見える。*1「年木庵喜三」銘は深海兄弟が香蘭社から別離した明治12年（1878）頃まで使われていたとされる。

受贈した中に「年木庵喜三」銘の碗は2種類存在する。類碗・蓋の内面の山水、外面の九鼎図はほぼ共通しているが、染付の色合い、器体の大小、そして銘の入り方が異なっている。大をA、小をBとして細かな違いも見ていこう。

Aは6点受入。高台裏に「年木庵製」、蓋高台裏に「明治年製」。Bと比較すると、落ち着いた深みのある青色で、大きさは一回り大きく、余裕をもって絵柄が描かれている。

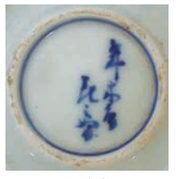
Bは2点。高台裏と蓋高台裏に「年木庵喜三製」。18世紀以降日本に輸入された合成顔料、通称ベロ藍を思わせるような鮮やかな青色で、Aと比較すると絵柄の線が太い。

しかし、深海親子作の明治年製の碗が受贈資料に含まれていることには年代的に違和感があり、前記の情報だけでは不確定なことが多い。製作者・年代に関しても、深海親子自身によるものなのか、2種が別々の時期に作られたのではないかという疑念もある。実は銀座の陶器商は、深海竹治の娘婿を取引先としていた。松本佩山という佐賀の陶人で、第二次大戦中には丸芸作家*2に指定されるなど評価の高い人物だった。この資料の出所として有力な線であり、さらなる検証は必要であるが、一見よく似た2つの片方は明治初年製、もう一方は後に松本が作った写しではないかと想像力を働かせたくなる。

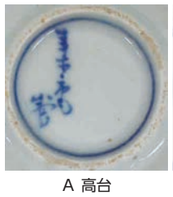
誰が作った染付蓋付碗異なる点は何を意味する？

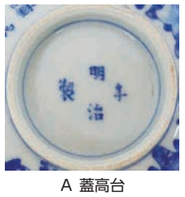
B

A

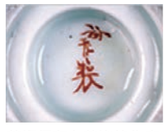

B 高台

B 蓋高台


A 高台


A 蓋高台

*1　株式会社香蘭社 “香蘭社銘”
https://www.koransha.co.jp/koransha_mei.html(2021/1/18)



*2　芸術保存丸芸資格作家。戦時下での自由な創作と販売が認められた。

参考文献

- 蒲地孝典 2006『幻の明治伊万里[悲劇の精磁会社]』日本経済新聞
- 有田町歴史民俗資料館 “3月27日 名匠・深海竹治(宗竹)誕生” https://www.town.arita.lg.jp/main/4870.html(2021/1/18)
- 有田町歴史民俗資料館 “深海墨之介誕生” https://www.town.arita.lg.jp/main.php/4689.html (2021/1/18)

水の文字の鬼瓦

遠藤　瞳子

鬼瓦に込められた防火の祈り

写真1　楷書体太字「水」

鬼瓦とは建物の棟の両端に設置される瓦の総称であり、瓦のつなぎ目を覆い雨漏りを防ぐ役割も兼ねている。鬼が持つ邪気を払う魔除けの力で建物を守ることを意図していた。馴染み深いのは寺院の屋根に取り付けられた迫力ある鬼の顔だろう。しかしながら、鬼の顔以外のモチーフも存在しており、打出の小槌などの縁起物や文字・家紋など実に様々な種類がある。このような鬼瓦が登場したのは安土・桃山時代で、城郭に瓦が使われるようになってからである。江戸時代後期になると幕府の火災対策により一般住宅も屋根に瓦を葺いたが、鬼瓦に関しては鬼の顔ではないモチーフを使った*1。これらはそれぞれに意味があり、文様として使用することで、人々は本来の役割だけでなく、願望や所属を示すための手段としての別の側面を持たせたのである。今回は数多くのモチーフの中から、「水」の文字（以下水文字）が陽刻された鬼瓦についてご紹介しよう。

この鬼瓦でよく見られるのは、写真1のように楷書体の太文字で水と書かれているものである。現代に作られた資料には文字の部分が金色のものも存在する。*2 一見亀の甲羅のように見える写真2の資料も水文字の鬼瓦である。図1に図示化した角字*3と呼ばれる伝統的な文字の書体で書かれている。この他にくずし字で水と書かれた鬼瓦がある。これらの鬼瓦には共通して火災防止や延焼防止の願いが込められている。また、楷書体「水」の鬼瓦をよく見てみると、水文字の囲いの両脇に小さなハートのような模様があることが分かる。これは猪目と呼ばれる文様で、形がイノシシの目に見えることから名付けられた（諸説あり）。元来、獣の目力は魔除けや厄除けとされ、イノシシは水を守護する獣であることから火除けの役割を兼ねているともいわれている。猪目文様の他にも雲や波の表現が見られるが、これらも水を連想させるため、火除けの意味合いを持つといえる。水の文字一つだけでもその性質を持つが、水に関連する要素をふんだんに盛り込むことで、鬼瓦としての厄除けだけでなく、火除けの性質を色濃く反映した資料であるといえよう。

「火事と喧嘩は江戸の華」という言葉があるように、木造平屋が多かった江戸の町において火事は日常の出来事であった。火に対抗できるモチーフを使用することで、出来るだけ被害を避けたいという人々の強い願いが込められているのだろう。

写真2　楷書体角字「水」

図1　角字「水」

写真3　猪目文様(図1拡大)

*1 鬼が近隣を睨む形となるため、他家への配慮から使用が避けられた（地域により例外あり）。
*2 金焼きと呼ばれる技法が使われている。
*3 漢字を縦横同じ巾の線で正方形に紋様化したもの、江戸時代に誕生

主要参考文献

- 春日井真英 2005「飾り瓦考―屋根の上に広がる世界」『東海学園大学研究紀要 シリーズB 人文学・健康科学研究編』10 東海学園大学
- 小林章男 1982「年表：鬼瓦」「鬼瓦をたどって」『鬼・鬼瓦』伊奈製陶東京ショールーム

M2 カタログ

捕者（とりもの）めいじろう キーホルダー販売中

明治大学公式キャラクター「めいじろう」のグッズが博物館に新登場です。
今回は、刑事部門の収蔵資料である「十手」「御用提灯」を携えた、捕方（とりかた）姿のめいじろうのアクリルキーホルダーを作製しました。
かわいい仕上がりとなっていますので、ぜひお買い求めください。

博物館の入り口に、かわいいフォトスポットができました！

フォトスタンドをご用意しましたので、
ご来館の記念にぜひご利用ください。

ミュージアムショップ開室時間

月～金10:00～16:30　土10:00～12:45
※日曜・祝日・大学が定める休日、8月1日～9月19日の土曜日は閉室
※日・祝の閉室は変更になる場合がありますので、ご来館の際は博物館ホームページでご確認ください。

来館案内

展示室ご利用案内

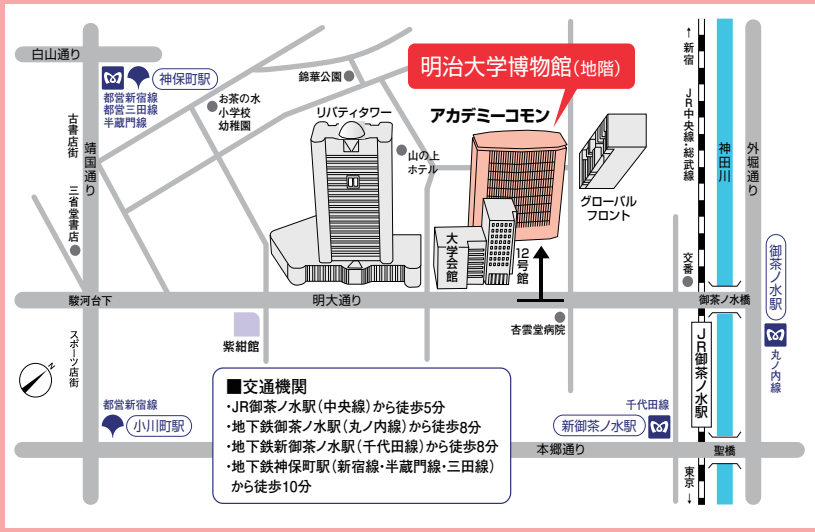
◆**開室時間**
平日 10:00～17:00（入館16:30まで）

◆**休館日**
夏季休業日（8/10～8/16）
冬季休業日（12/26～1/7）
8月の土・日に臨時休館があります。

◆**観覧料**
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- 現在新型コロナ感染防止対策のため、学内関係者のみ利用可能（オンラインによる事前予約制）です。詳細は博物館ホームページをご覧ください。
- ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。



開館時間については変更する場合がありますので
博物館ホームページでご確認ください。

MUSEUM EYES
ミュージアム・アイズ　2021年　Vol.76

明治大学博物館　MUSEUM EYES（ミュージアム・アイズ）第76号
〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1　アカデミーコモン地階
【TEL】03-3296-4448　【HP】https://www.meiji.ac.jp/museum/
2021年3月26日発行　【印刷】株式会社博秀工芸　【第76号制作スタッフ】島田和高・忽那敬三・遠藤瞳子・勝見知世